キリスト教思想研究入門 5/11/2009

S.Ashina

＜前回＞宗教改革とガリレオ裁判

（１）宗教改革

１．プロテスタンティズムとは何か

２．宗教改革（ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら）とその広がり

３．宗教改革の思想内容（三大スローガン）

４．人間は何によって救われるのか？　行為義認と信仰義認

Q：行為義認と因果応報説の関係を論じよ。

Q：以上の転換は、錬金術から化学・心理学への移行と、どのように関係づけられるだろうか。

Q：農民戦争に対するルターの対応を、この観点から論じよ。

６．「聖書のみ」（聖書主義）の理念が歴史的な現実となるには、数百年の時間が必要。
聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立／初等教育の普及（識字率）

７．市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム

９．近代的な世俗性への二面的な関わり

（２）ガリレオ裁判とは何か

10. ガリレオ裁判を「宗教と科学との関係史」の観点から見る。

12. 最近のガリレオ研究（芦名定道『宗教学のエッセンス』北樹出版、176-177頁）によって、以上の単純な対立図式の事例としてのガリレオ事件という見方は大きく修正されてきている。

14. カルヴァン：「適応の原理」（principle of accommodation）
カルヴァン『創世記注解』

15. 「適応の原理」の思想的意義

16. では、どうしてガリレオ裁判は避けられなかったのか。カトリック教会はなぜ天動説に固執したのか。

２．　啓蒙主義と理神論

（１）現代宗教論の前提としての近代

１．近代の知的世界の状況が、以降の思想状況を規定している。
ポスト近代という近代？

２．プロテスタント時代としての近代
伝統的なキリスト教世界（コルプス・クリスティアヌム）の解体によって規定された時代

３．いつから近代か：トレルチ　→　古プロテスタンティズム、新プロテスタンティズム

４．近代は単一か：二つの近代、啓蒙的近代と聖書的近代、政教分離の二つの形
世俗的ヒューマニズムとキリスト教的ヒューマニズム

５．近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス

キリスト教の普遍性あるいは合理性に対する根本的な問題提起

社会統合の原理がキリスト教から次第に分離し、キリスト教の地位が相対的に低下する。

キリスト教会→国民国家、神学→哲学→科学

６．啓蒙主義とは？　（シャンタル・ムフ『政治的なるものの再興』千葉眞他訳、日本経済評論社）

・「啓蒙の抽象的普遍主義、社会的全体性に関する本質主義的構想、単一の主体の神話」「啓蒙の認識論的視座」「自己の基礎づけにかかわる啓蒙のプロジェクト」

・「万人の平等と自由とを成就していった近代の政治的プロジェクト」

Alister McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.

7. A Dead End? Enlightenment Approaches to Natural Theology. pp.140-170.

７．啓蒙主義の思想的意義：絶対主義批判、理性の自立性・人権、普遍主義、人間解放

自由と自律（autonomy）　→　国家と教会という他律的権威への批判

啓蒙的理性の合理性と普遍性の主張

（２）啓蒙主義的宗教論　（17 ～ 18 世紀、イギリスからフランス・ドイツへ）

８．エドワード・ハーバード（Herbert, Edward 1581-1648、チャーベリーのハーバード）

ジョン・ロック（Locke, John 1632-1704）：経験論哲学、広教主義、宗教的寛容や政教分離、『キリスト教の合理性』（*The Reasonableness of Christianity*,1695）

ジョン・トーランド（Toland, John 1670-1722）:『非神秘的なキリスト教』（*Christianity not mysterious*, 1695）

カント『単なる理性の限界内の宗教』（1793）innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft

Emanuel Hirsch, *Geschichte der neueren evangelischen Theologie im Zusammenhang mit den allgemeinen Bewegungen des europäischen Denkens*.

９. 理神論、キリスト教の合理化の試み　→　キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。

10. 宗教本質論として：信仰とは、信仰命題を真理として受け入れること。知的営み。

ハーバード『真理について』（1624）：理性宗教（自然に備わった生得的なもの）

最も本質的な最高存在が存在する、最高存在への崇拝、敬虔な崇拝は美徳である、罪は悔い改めによって贖わなければならない、来世（因果応報的）の存在

（３）啓蒙主義の限界・問題性

11. 理性の普遍性と合理性

啓蒙的な普遍性は人間と文化の個別性を正当に扱いうるか　→　ロマン主義

啓蒙的な合理性概念は一面的ではないか　→　基礎づけ主義批判

芦名定道「現代キリスト教思想と宗教批判―合理性の問題を中心に―」『宗教研究』（日本宗教学会）第 82 巻、357-2、2008 年 9 月、pp.227-249 。

John H. Hick, *Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963.（邦訳あり）

12. キリスト教あるいはキリスト教思想は、「近代」「啓蒙」に対して、どのような態度を取ってきたか、取り得るか、取るべきか。

近代の推進者・共犯者としてのキリスト教／……

／近代の批判者としてのキリスト教／……

／反近代の代表者・原理主義者としてのキリスト教

↓

近代は、キリスト教にとっての危機か、あるいはチャンス（危機におけるチャンス）か？

成熟した社会（成人した世界）におけるキリスト教（ボンヘッファー）とは？

＜参考文献＞

『トレルチ著作集』（ヨルダン社）。

『ティリッヒ著作集』白水社。

大津真作　『啓蒙主義の辺境への旅』世界思想社。

安酸敏眞　『レッシングとドイツ啓蒙－レッシング宗教哲学の研究－』創文社。

芦名定道　『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。

大木英夫　『新しい共同体の倫理学　基礎編　上下』教文館。

『組織神学序説　プロレゴーメナとしての聖書論』教文館。

近藤勝彦　『デモクラシーの神学思想』教文館。

＜パネンベルク＞

Pannenberg（1997）：　Wolfhart Pannenberg, *Problemgeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Scheleiermacher bis zu Barth und Tillich,* Vandenhoeck & Ruprecht

「近代神学史とその発展過程を宗教戦争の時代の終わりの状況と関連づけたことは、エマヌエル・ヒルシュが彼の神学史においてなした功績である。……寛容の思想は１６世紀と１７世紀の恐ろしい信仰戦争の終局において戦い合った諸教派の全キリスト教的主張が挫折したことによって初めて広まった。この戦争がおおむね妥協によって終わったのち、キリスト教と社会との関係における新しい状況が事実上成立したのである。」（S. 25）

「人間の＜本性＞概念に立ち戻ることによる国家と法の独立」「宗教的告白の私事化」

「社会の部分領域の自律性とそれに関連して発展した世俗的な文化意識」

「これまで宗教の統一が社会秩序の統一にとっての不可欠の土台と考えられてきたのに対して、今や共通の人間的なものと理性的なものが未決の宗教的問いの断念の下において、共同的生の基盤を形成しなければならなかった。つまり、それが中心としての人間への転回の根拠であり、バルトが言った＜絶対主義的人間＞の出現の根拠なのである」（ibid.）。

＜大木＞

「啓蒙主義の影響のもとで、神学が取り組んできたリアリティがあいまになっている知的状況」（39）、「文化プロテスタンティズムが神学の方法として取り入れた「ヴィッセンシャフト」は学問的な確かさの追求でありましたが、それはかえって宗教的リアリティの確かさを喪失させる結果となったのであります。」（41）、「プロテスタント的状況」、「「コルプス・クリスティアヌム」とは異なる方向に向かうものであり、この中世体制を崩壊させて行くような変動過程」（77）、「新しい人間の発見」、「カントが教えるような理性によって立つ啓蒙主義的人間の自立（自律）とは異なる自立、聖書によって立つ人間の自立」（83）、「聖書による人間主体性の確立」（84）、「アングロ・アメリカ的近代性とドイツ的近代性というこの二つの近代性の由来となる＜分岐点＞を求めて歴史を遡れば、三十年戦争とピューリタン革命との違いに至るのであります。」（125）